

歴史と教育

大西友太

普通吾々の生活事實から見るときは、人は歴史の作るところであつて吾々は全くその影響の下に一人前の人間となつて居る。随つて教育界に於ても歴史の影響を認めること最も痛切であつて、多くの場合には教育といへば過去の歴史の影響で人間を造るものゝやうに考へられて居る。併し考へて見れば歴史は全く一回限りの独自の性質をもつものである。随つて過去に發生した歴史が後に他人の生活中に再生せられてその中の一要素となるといふことは出來得べき筈のものでないから、歴史が後世に教育的影響をもちその流れの中に於て人間を造るといふやうなことは科學的には本來承認すべからざることであるといはねばならぬと思はれる。然らば常識で歴史と教育との關係を考へて居るのは根據のないことであつて、本來科學的には吾々はこの關係を否定せねばならぬのであらうか。必らずしもさうではない。哲學的に考へるときは吾々は反對にこれを肯定し兩者の奥深き關係を承認

せねばならぬものがあるを發見する。

勿論歴史は過去に於て實在せるところの現實的事實である。隨つてこれをその初めの通りの姿で再び後世に生ずること能はざるは多言するまでもない。このやうな意味では歴史は全く吾々の知識となり生活の要素となること能はざるものである。併しかゝる意味に於て歴史の認識を論じ知識を考へるならば、獨り歴史に限らぬ凡ての事物は吾々の知識となること能はぬものである。認識模寫説の承認すべからざるを知れる今日最早何人もかゝる意味で歴史の認識を考へ、その知識の所得を論ずるものはないであらう。吾々は歴史の認識に當つても矢張意味は實在の上にある認識論上の眞理を承認し、この認識を指導するに足るべき妥當的價値を考へねばならぬ。倅然らば如何なる價値がこの場合に於てその妥當的價値としてこれが認識を成立せしむるに足るものであらうか。勿論かゝる價値は歴史の論理上單純なる個人的精神ではなく、人間としての内容全體と見らるべき精神でなければならぬ。

この精神が感覺的存在としての個人の中に如何に働いて居るか、歴史の問題である。家康といへば秀吉のつぎに出て來て日本の天下を無理取りした人物である。

感覺的存在としては勿論或る特性をもつて居つたのであらう、またその特殊の存在の中に特殊の性癖や趣味をもつた個人的精神が働いて居つたことであらうと思ふ。卑屈なる家臣などの中にはこの精神を迎へその歡心を得るために汲々として居つたものゝあるのも見られるが、歴史といふ時は本來かゝる個人的精神に關心するものではない。歴史に於て關心するところのものは妥當的價値の精神である。國民精神なり又は更らに進んで一般に人道の精神なりに關心するものであつて、この精神が如何に家康に於て體驗せられその感覺的存在の中に固有の形式を以て實現せられたかといふことが歴史の問題である。隨つて史實としての家康の認識に當つては吾々はその指導原理としてこの一般的妥當の精神をもつと共に、その原理の家康に於ける體驗を考へねばならぬ筈である。この後からの體驗のあるために妥當的價値も只漠然たる抽象的存在とならず家康の感覺的存在と結合してその固有の歴史を作るものとなり、吾々をして家康の話また歴史の個性的概念を得しめる。歴史家が家康があの場合にあつたのがよかつたとか、或はあゝすべきではなかつたとかといふのは、これこの體驗の立場に立つてその固有の概念構成に努めて居る所であつて、この妥當的價値の個性的體驗を離れては家康の歴史は全く吾々には理解

すべからざるものとなつて終ふ。

勿論この後からの體驗の中には吾々自身の想像を加へねばならぬものがある。随つて歴史の理解には常に主觀性の危險を伴ひ易く、殊にこの主觀性が時代精神の背景をもつ場合に於ては危險が甚だ多い。時代によつて歴史に對する理解が非常に異なるどころあるは吾々の十分承知せるところである。されば吾々は歴史を理解するに當つては時代を超越し惡主觀性の危險に遠ざからねばならぬこと勿論である。このためには吾々はその主觀性の想像を指導するに妥當的價値の發見を以てせねばならぬ。或る特殊價値に偏することなく、一般妥當的價値を以てせねばならぬ。かくて結局吾々は普遍史的價値を發見せねばならぬ。恰も裁判官が權利に對して強き興味をもちそのイデーに基いて凡てを判斷するやうに歴史は文化一般に對して興味をもちこれに基いて凡てを判斷せねばならぬ。こゝに裁判官も權利によつてその仕事に客觀性を與へる如く歴史家は文化一般によつてその對象に客觀性を與へ得る。裁判官の關心は權利の客觀的實現である如く歴史家の關心は文化一般の客觀的實現でなければならぬ、随つて歴史家は無關心及び無評價の立場に立つてはならぬ。強き文化意志なるものをもたねばならぬ。即ち文化の個性的實

現の立場をもたねばならぬ。この意志の體驗のあるときに歴史家は明晰なる固有の概念構成を得られ、過去の史實としての個性をその實際よりも以上に明晰にし即ち一口にいふならば史實の理想を明晰にしてこれを現在一層生命あるものとなすことも出来る。

有爲な歴史家の手によつて過去の史實がその當時よりも一層生命あるものとして後世に生きて來ることはよくあることである。孔子が春秋に於て支那史の理想を明晰にしたゝめに從來只斷片的に現はれて居るに過ぎなかつた支那史の精神が國民の前に明晰なる形式を以て提示せられ、新しき生命をもつた歴史としての新支那史を作るに至つたことは人の知るところである。吾々は春秋を見るときは如何に孔子が支那の精神を明晰に理解せるか、又この精神を通じて一般に人道の精神をよく理解せるかを思ふと共に、またその史實中に於けるこの一般的價値の體驗がこれをして一層深き意味のある固有の史實たらしめて居るかを考へて、斯の書にをける支那史實の進歩に警嘆せざるを得ぬものがある。史官の後を襲うて趙盾その君を弑すと斷定したゝめに如何にこの史實が道德的にその個性を深めて來たか春秋を見るものゝ齊しく驚嘆に堪へぬところである。

記憶によつて過去の史實が現代のものとなるといふが、この記憶 *Erinnerung* といふことは本來この後からの體驗によつて我のものとなすことである。只單に過去のものゝ現代から見てこれをそのまゝ現代に保存するのではなく、現代から見るといふところに既に後からの體驗によつて現代のものとなし、記憶するといふよりも內的に我のものとして現在にこれを活かすのである。現代に居つて歴史を論ずるといふことはこれを我のものとして現代に活かすことである。歴史は全く哲學的主觀性の中に生きて居る現在の個性的事實である。現在はその現在と呼ばれる限り分つべからざる今なる瞬間に違ひないが、歴史の認識上ではこの今なる瞬間に過去を活かしてこれに新らしき生命を興ふべき自己規定性がある。過去はそのまゝ現在となることは出来ぬが、現在には過去を規定してこれを現在に活かすべき力がある。いはゞ新らしき過去を現在に於て創造すべき力をもつて居る。而も凡ての意味に於て再び見るこの出来ない個性として創造すべき力をもつて居るのである。

歴史は一度限りの事件であるといふが、現在こそはこの個性の一度限りの意味を最もよく現はして居る。過去の歴史は現在に活きることが出来ぬではなく、現在に

於て唯一の實在と生命とをもつて居るのである。現在がなければ過去の歴史はない。過ぎ去つた過去の事實は現在の個性の創造に於て永久の歴史的發展たるを得るのみである。現在が唯一の生命であつて過去の歴史は凡てこの現在の個性の形式の中に入つて生命を得れば新發展もする。歴史は個性の創造であり發展であるが、この意味は現在に於て最もよく現はれて居る。現在こそは本來の意味に於ける活ける個性の唯一の歴史であつて、この現在の直觀の内面に於て個性の絶對性のあるところに歴史の絶對性がある。歴史は元來時間の問題であるが、こゝでは現在歴史に絶對的價値を有し永久の姿に於てこれを解決して居る。歴史の哲學的意味では現在こそは永久の實在として超時間的に過去と未來とを創造する個性であるといつてよい。君子は朝に道を聞いて夕に死すとも可なりといふが會ひがたき個性にあつて聞きがたき道を聞き、現在個性の絶對を發見したものからいふときは今なる瞬間こそ實に幾十百年にもかへがたき生命であるから、心の底から斯の叫びがあるであらう。個性の自由によつて永久の今なる生命を得たものゝその生活に對する感想からいふときは、斷言命令のある印としてかゝる言葉がその唇を突いて出るであらう。吾々人間では過去を聞くを得たときこそ絶對的個性に立ち歸つた永久

の現在である。

カントは純粹理性批判と實踐理性批判とに於て有限と無限との二問題を提出し、而してこの二律背反を斷言命令なる一命法の下に解決したが、この命法の中に個性の絶對があり永久の現在がある。こゝでは現在が一切の目的々實在である。神は無時間の創造によつて人格をもつといふことはこの現在の體驗の内面を示した言葉であり、神は人間の道德法の中に現はれてその永久を保障するといふことは、この内的直觀を開展した現實的歴史の第一性質を示すものである。現實普遍絶對的個性永久の現在、これ等の問題は吾々人間では只この一命法、斷言命令の下に現在の個性が解決すべきものであり、又解決し得て餘蘊なきものである。吾々はこの一命法によつて必然を徹底して自由の天地に出で感覺的存在から一躍して無上價値の個性の立場に轉廻し、現在歴史の絶對的個性として神が欲したまふ故にあるといつたやうに超論理的自由の非合理性を以て無限價値の合理的歴史を作り具體的普遍史を作る。現在こそは永久の價値である。自由を知らぬものは人でない如くこの現在を知らぬものも亦人ではない。吾々は只現在に活き、現在の個性中に永久を藏して居る。吾々の歴史を解決すべき凡ての鍵鑰はこの現在の個性にある。吾々の端

的に先驗史と呼びうべき歴史はこの個性の中に純粹なる形式を以て内觀され、只一つの個性の中に無数の個性、無限の歴史が内觀されて居る。否内觀されて居るといふことも既にこの絶對的個性を反省して論理的言語を以ていつた説明に過ぎぬのであつて、この反省のない個性の眞の現在に於てはこの兩者は全く分つべからざる絶對的統一の一實在となつて居る。作るところの唯一の個性と作られるところの無数の個性とは奇妙なる言語を使用するやうではあるが、凡て一絶對となつて居る。一々の事件が全く超言語の絶對史である。過去の歴史が現在に活きるとは結局この絶對となることである。個性の現在の絶對的創造に基いて絶對性を以て現在に定立せられることである。

併し歴史を論じてこゝに至るときは過去を現在に活かすといふことは歴史の眞理を得て居らぬ。歴史の眞理は現在から溯つて過去を作るにある。現在の絶對性から歴史が創造せられるとき即ち現在から未來の歴史が作られて往く中に過去の歴史はその流れの中に於て新たに作られるのである。歴史の絶對性に於ては現在に過去も未來も含まれて居るが、この現在から未來を作るところに過去の歴史が作られる。前に述べた歴史の妥當的價值及びその體驗によつて歴史の認識を得ら

れるとはこの事である。普通の歴史的考へ方では過去が現在に生きてその現在から未來を作るものゝ如くに考へられるが、これは作られたる歴史を後から反省したときの考へ方である。歴史を作る本來の立場ではこれと反對の途を通つて居る。斷言命令によつて現在絶對の個性を有せるものに於ては未來を作るところに過去が新らしく生まれて來る。孔子は述而不作といつたが、是は歴史の客觀性を重んじた謙遜の言葉であつて、この客觀性を承認する主觀の眞の歴史生活からいふときは實は作つて往つたから過去の事實を述べてその歴史上の意味を明らかにすることが出來たのであると思ふ。春秋は何よりも著しき證據である。過去の事實を動かしたのではないが、體驗によつて現在新らしき歴史を作つて往くところに孔子はこの過去の事實としての雜多の史實を春秋の新秩序の歴史となすを得たのである。現在に價値を有せる個性即ち歴史の本質に於ては直接未來に關心するところに翻つて過去の歴史を生ずる。斷言命令によつて二律背反を完全に解決し現實普遍の立場を得たる個性から見るときは歴史の絶對性は現實以外にあるのではなく、全く現實ながらにして絶對性を得て居る。當爲の絶對命令を以て自然一般が歴史一般に轉廻し具體的文化の人倫の世界が展開して居る。この世界では我は純粹なる事行

として現在が絶對の歴史であり、絶對の力を以て未來の歴史を創造する。現在から見るときは吾々はこの未來を作るところに過去を産んで往くのである。未來は現在の直接的關心であつて過去は只間接的關心にしか過ぎぬと共に、この未來を産む現在の絶對的個性に於ては歴史ではなく歴史の創造が直接關心せられて居る。歴史はこの創造によつて作られた結果の世界に關心するものである。こゝに教育は歴史よりも一層奥深く立ち入つて我の個性に本來的立場をもつべき理由がある。

勿論歴史は科學的に見るときは既に述べたる如く過去の一度限りの事件であつて現代に再生すること能はざる者である。随つて常識では歴史と教育との關係を考へ、教育に對する歴史の影響の大なるを認めて居るものゝこれにはなほ吾々の考へねばならぬ問題がある。即ち既に述べたる歴史の認識なる問題これであるが、吾々はこの問題について考へ、歴史の固有の概念構成から見るときは過去の歴史は凡て現在に生きてその固有の生命をもつて居ることを知つて來る。過去の史實をそのまゝ現在に持ち運ぶことは嚴格に許されざるに拘らずその歴史が常に現在に於て教育的生命を有しその力によつて人々を教育して往く。哲學的生活によりて現在歴史を有せるものでは歴史は活きたる教育者である。古來幾多の學者教育家、

否、殆ど凡ての人類が歴史によつて人を教育すべきことを考へて居るといふことは、現在に生命をもつ人格として當然であるといはねばならぬ。併し考察はなほこゝにつきるべきではない。吾々は歴史がかく現代に生きてその教育者となれる所以をなほ進んで考へねばならぬが、歴史の眞理によるときは過去の歴史が現在に生きてその生命をもつといふことは實は現在に於いて過去を作るに由るのである。過去の力によつて歴史は現代に流れ込んで來るのではなく、現代の力によつて過去の歴史が現代に引き入れられ、なほ詳しくいふならば現在から未來をつくるところにその未來の力によつて過去の歴史が現在に活かされるのである。歴史は凡て現在の絶對性の中に解決せられるのである。この現在に於いては實は歴史の世界ではなく創造の世界、人格の純粹なる構成の世界が我に直接の世界であつて、歴史の世界はその内容を作るところの間接の世界となつて居る。随つて吾々は人格の實現に本來的使命をもつ教育の根源を求めらばこの歴史を作るべき我の純粹なる創造活動の世界にこれを求めねばならぬ。尤も教育の根源をこの歴史の創造活動に求めるについては、なほ教育その物について分析的に攻究し經驗的に教育の概念を決定するに待たねばならぬものあるは勿論であるが、この研究は自ら一個の獨立の

研究を要すべきものであるから他日又改めて卑見を述べることゝして、こゝでは只一般に歴史問題から教育の根柢に論及するに止めて置きたいと思ふ。随つてこゝに論ずるところでは未だ教育固有の概念構成となつて居らぬことを斷はつて置かねばならぬが、兎に角歴史の問題を解決すべき現在の個性に於ては歴史よりも歴史を作る創造活動それ自身に關心して居る。こゝに人格の本質があるのであるから教育は本來この創造活動にその立場を求めねばならぬことだけは疑ひないところである。随つて教育の立場は歴史の立場の背後にあるだけ一層具體的であり又深刻である。歴史は吾々の有する文化の中で最も具體的であるが、この歴史もその背後にある創造的人格に比較するときは只その可能の一世界にしか過ぎぬ。教育の先驗こそ凡ての意味に於て最も普遍的であり又最も具體的である。これが本來吾々が教育から歴史を見ることは出来るが、歴史から教育を見ることが出来ぬ。歴史から見た教育は只教育によつて作られた結果を見るものに過ぎぬ。随つてこの見方では結局教育固有の概念のない抽象的表象を得るに過ぎぬ。吾々はこの獨斷的見解を破らんとせば歴史の客觀性から主觀性に進み、主觀性と客觀性とを同時に肯定し得べき絶對性に立たねばならぬ。メーリスが歴史の論理に於て普遍史に達す

ると同時に人生哲學に轉廻すべきを感じたのもこれと同一の理由によるのであるが、この新立場に於て個性の絶對的創造を得るとき吾々は歴史の問題を完全に解決すべき立場に立つて教育の目的ならびにその方法及び固有の概念構成をうべき世界に出られる。斷言命令によつて現在の個性の價値を發見せるものではこの歴史から創造への轉廻ならびにこの創造に於ける教育固有の立場及びこの立場に於ける歴史の教育的意義は山頂に登つて四方を見渡し得るものゝ如く吾々の一時に解決し得るところでなければならぬ。

余は前に卑著「認識と教育」に於て認識の立場から教育を論じ教育の本領は結局斷言命令に立つものであると論斷して置いたが、これは既に認識の立場から歴史の立場に轉廻して教育を論じて居るのである。いふまでもなく批判哲學によつて認識の方面から教育の基礎を決定せんとするときには認識が課題である限りこの方面に於ける教育の無限進歩を承認せねばならぬが、吾々はこの認識を以て課題とする論理を反省して本來の我の立場に立ち歸つて見るときは體驗の立場に出で、自然から轉廻して歴史を考ふべき立場に達する。こゝに初め、人格及びその教育は具體的に考へられるのであるが、吾々はこの歴史の本來的立場、我の自由の斷言命令に立

つとに歴史の絶對性を得られると共に、教育も亦絶對性に達する。こゝでは教育は現在絶對の價値を信する無限進歩の歴史創造の活動である。如何なる特殊史でもない。歴史一般、普遍史を創造する活動である。この創造活動に至つては吾々は最早何の理由をもたぬ。全く超論理の非合理性の絶對的創造である。唯一つの個性が純粹なる創造活動に於て無數の絶對的個性を創造し無限價値の具體的歴史を作る。随つて教育はその連續的進歩の各階段に於て現在個性の絶對性に基いてその活動に絶對的價値を感じつゝ無限に進歩すべき歴史創造の活動である。フイヒテの純粹事行が教育の性質を最もよく語るものである。教育は所謂双極作用であつて教育者が被教育者に影響を與へるにあるは勿論であるが、この教育者も被教育者も共に教育上に於ては絶對的個性たることを要求する。教育者が絶對的個性として無限價値の個人的歴史を作る創造活動の中に於て被教育者は又自己の絶對的個性を發見しその個性から又無限の個性としての具體的普遍の歴史を作る時のみ本來の意義に於て教育が見られる。教育者が個性の絶對に立ち又被教育者の個性の絶對を承認し被教育者は又その絶對の個性から絶對の個性史を作るとき教育の絶對性があり本質がある。教育は所詮個性の絶對活動である。こゝに教育の

態度の獨立性もあれば又價値の客觀性もある。絶對的に一致せる立場に立つて絶對的に異なれる方向に進んで往くのが教育であるといへば不可思議の様ではあるが、二律背反を解決せる斷言命令の個性の教育ではこれが眞理であつて、こゝでは只神が神のみを知るといつたやうな意味で絶對の個性が絶對の個性を作り具體的價値の普遍史を作る。只端的に具體的普遍と呼べるべき唯一の歴史を作るを得る。歴史の本來に於てはこの個性の絶對的創造活動であつて、こゝでは創造といふ外何物もない、我を作るといふことが唯一の我であり、教育といふことが唯一の我である。

我は教育としての當爲實在であるといふところに歴史はその直接的内容となつて居る。社會の極限は歴史であるがこの歴史の極限は教育であつて、教育に於て吾々の生活運動は最も深刻であり、且つ具體的である。吾々はその人格の根抵に於て歴史の創造をもつ故に與へられたる過去の事實としての歴史の認識及びその體驗といふことが當爲の命令を以て要求され、一般に吾々の現實的社會生活に於て所謂 *I. calsozia ismu* なる態度を生ずるが、この理想的社會主義即ち社會生活の凡ての問題を理想主義哲學によりて解決すべきであるといふ事は最も深刻なる意味で教育に待つものである。歴史問題の根抵は教育にある。(完)